

春祈禱と神楽(太神楽)

東北歴史博物館

笠原 信男

はじめに—今年度のテーマ—

列島には四季があり、人々は、季節ごとに自然の移り変わりに寄り添って暮らしを営んできました。季節ごとに、繰り返し行われる祭礼や年中行事等があり、神仏や自然に感謝し、先祖を敬い、日々の暮らしの安穩を願った。

こうした祭礼・行事等は長いしきたりとして行われており、いつ、なぜ始められたかについて知るのには難しいことが多い。また、不変というわけでもなく、特に、神と仏が切り離され、太陽暦が採用されるなど、古代・中世以来の常識が見直された明治初期は、実施に大きな混乱が生じた。さらに、現代でも、家族の小規模化、地域のつながりの希薄化などにより、大きく変化している。

この講座では、四季に行われる祭礼・年中行事、芸能に見られるいくつかの視点・要素を取り上げ、これらが地域社会・文化の中で、どのように受け入れられてきたかについて、考えてみたい。

宮廻正明東京藝術大学名誉教授は当館で実施している「東京藝術大学スーパークローン文化財展 最先端技術でよみがえるシルクロード—法隆寺・敦煌莫高窟・バーミヤン」の記念講演会(H30.4.20)で、「ジャポニズム」についてふれ、以下のように説明している(文責筆者)。

日本文化は「模倣」・「変容」・「超越」に特徴がある。自国風に変える「変容」までは他国でも見られるが、オリジナルを越えてみせる「超越」が日本の得意とするところである。現代の産業では車や時計がそう。

シルクロードの文化を始め、長い間、日本にやってくる文化は、すべて、「西から」であった。中国・朝鮮半島経由で入ってくる。その玄関口は九州であり、博多や長崎であった。江戸時代の終わりに港を開いて、初めて、江戸に近い横浜に「東から」入った。

文化は西からの時代、東北は文化の最終到達地であった。こうした状況を反映してか、不本意ながら、古代の文化財は西日本の多く残り、東北には少ない。しかし、東北は決して「文化の吹きだまり」ではない。この講座では、日本に入ってきた文化が、日本の地で、東北の地でいかに、溶け込み、オリジナルを超越した、日本・東北の文化として根付いているかを具体的な例をもとに探ることとしたい。

第1回目は「春祈禱と神楽(太神楽)」と題して、獅子舞を取り上げる。

1 獅子舞(悪魔払い)は外来芸能

2人以上で獅子1頭を演じる獅子舞は日本の各地で行われている。民俗芸能研究の大家、本田安次は日本各地で行われている獅子舞を以下の4種に区分している(1)。

第一 舞楽、田楽、神楽等の中にその一曲としてある獅子

「仙台邊の出雲流の神楽にある獅子等」も含まれる。「獅子の外に獅子あやしが色々な形で出る。これらは多く一舞舞ふだけのもので」、「舞楽の獅子と最も近い」。

第二 独立に行われている獅子

「十二段などと云って様々の舞ひ方」があり、「散楽風の曲芸を演ずることが多い。これにも多く獅子あやしが出る。獅子はまた虎」にもなる。「祭礼の神輿渡御に際し、その供につくことが多い。その前後に色々な仮面の伴がつく所がある」。

第三 山伏神楽や番楽の獅子

「獅子を権現とあがめ」、「霜月の頃村々をめぐり、その戸毎に権現をまわして、悪魔拂い、火伏せ等の祈祷をなし、その泊り泊りに民家の一間を舞台として古い能や舞を演ずる」。

第四 太神楽の獅子

「伊勢のお祓いと称し、獅子をまはして竈拂ひや悪魔拂ひの祈祷をなしつつ諸国」を巡った。「伊勢には古くからお頭神事といふのがあった。ここでいふ第二の類の獅子舞を称したのであるが、これが神体とし、散楽風の曲芸などをも演じつつ、太神楽と称してめぐったもののようである。これが年を重ね相当の人気を呼んだらしく、土地土地の若者達が伝習し、年々の神祭りに自ら演ずるようになった」。

獅子は、西アジアからアフリカ大陸にかけて生息するライオンを神格化した想像上の動物である。百獣の王であるライオンは人にとって畏怖すべき対象であり、また、それを見方にして人を守護させ、見えない外敵に備えるという感性をもとに、獅子舞は芸能化されたと考えられる。獅子舞は中国から朝鮮半島を経由して、伎楽ぎがくという芸能とともに古代にもたらされた。『日本書紀』推古天皇二十年(612)に、百済くだらから来朝した人物が中国から百済に伝わった伎楽を伝えたことが記されている。

伎楽くれがくは呉楽ともいわれる、一種の仮面劇である。飛鳥・奈良時代には仏寺の供養や朝廷の饗宴で上演された。奈良時代、各地に建立された国分寺でも上演されたらしい。伎楽において獅子は、行道または神幸の先導者として、露払いの役割を担い、邪鬼・悪魔を追い払う。

悪魔払いの「悪魔」は仏教用語で、「マーラ」の漢語として仏教伝来とともに日本に入ってきた。「仏道をさまたげる一切の悪神、仏に敵対する鬼神」を意味する(2)。後に変容して、「人に災を与えたり、悪の道に誘い込むとされる邪悪なもの」となる(3)。悪魔払いはこの悪魔を除去する修法で、仏教(密教)や修験道の調伏呪文、加持祈祷の類等

とともに獅子舞もその法の一つとされる。また、宮城県の民間習俗では大晦日に各家で悪魔払いが行われており、それには幣束や鉄砲が用いられる(4)。

○年越しにお年男がお飾りを飾った後、幣束を持って「悪魔払い」と唱えながら家中を廻り、元日にも元朝詣りに行く前に同様に行う。後、幣束を便所の軒端にさして納める(栗原郡金成町長根)。

○年越しの夕方、年男が上座敷から戸口へ向って「悪魔払い、悪魔払い」といいながらお幣束を振り、悪魔を払い終ってからお幣束を三方の辻に立ててくる(本吉郡志津川町戸倉折立)。

○年越しの夕食前に、年男が鉄砲で家中の悪魔を払い、上座敷の雨戸をあけて一発撃つ(桃生郡河南町前谷地)。

○年取りの夕食前、アキの方へ向けて鉄砲を三発撃つ。悪魔払いであるという(白石市犬卒塔婆)。

伎楽にやや遅れて、奈良時代に唐楽や高麗楽を伴奏とする舞楽が伝わる。舞楽にも獅子舞があり、やはり寺院の法要等で演じられた。舞楽の獅子舞は、大阪府・四天王寺の精霊会(聖徳太子の命日[旧暦2月22日])に行われる大法要)や島根県・隠岐国分寺蓮華会舞(弘法大師の命日[4月21日])に演じられる)で、今日、その様子を垣間見ることができる。舞楽は鎌倉時代には地方の有力神社でも行われ、それに伴い、獅子舞も各地に伝わり、徐々に地域社会に溶け込み、人々の生活に身近になっていく。

地域の神社を守る狛犬も、もとをただせばライオンで、獅子である。古代・中世の狛犬は建物内のより神に近い場所で神を守護していた。江戸時代には社殿前に鎮座して、神社を護る存在となった。獅子は日本に定着するにつれて、数が増加した。これらは、見えない外敵からウチを守るといふ伎楽・雅楽系獅子が変容してこそ可能な展開であった。

2 獅子舞(御神体)は外来芸能の超越

時代が新しくなると、獅子は悪魔払いだけでなく、新たな姿を見せる。神や人を護る存在から、神そのものとして獅子が扱われるのである。これには、あの世(彼岸)の仏がこの世では神として姿を見せているとの考え、仏と神が交流する、神仏習合思想の普及が背景にある。

神を招くには、神の依るべき「座」、神座が必要とされる。古代の人々は、神座を用意し、神を迎え、神の加護を期待して祈祷を行った。神の魂を時に振るわせ(タマフリ)、減衰した活力・魂を復活させる。また時に鎮め(タマシズメ)て、人々の生活の安寧にとって畏怖すべき、天候不順、凶作や疫病を引き起こす神々の活動を抑制する。タマフリにより、春は収穫予祝、秋は収穫感謝を願い、タマシズメにより天候良好・疫病退散を祈願する。

民俗芸能の神楽は神の座に神を迎えて、タマフリ・タマシズメにより、祈願を行う芸能の一つである。多くの神楽は神を迎えるために、榊などの依り代を用意した。しかし、それにとどまらず、たがて獅子を神そのものとして捧持する獅子神楽が生まれる。獅子神楽は御神体としての獅子を捧持し、邪鬼を払うために火伏の祈祷を行い、息災延命等を祈願する。このように獅子を丁重にもてなす獅子神楽では獅子舞を権現舞(権現は神一般の名称の一つ)とする。獅子神楽の流れは大きく二種があり、一つは岩手県・青森県・秋田県・山形県の山伏神楽・番楽である、今一つは伊勢(三重県)や尾張(愛知県)の太神楽である。

太神楽は「伊勢のお頭^{かしら}神事」から発しているという。この神事は、先に紹介した本田安次の獅子舞区分の「第二 独立に行われている獅子」に該当し、小正月に獅子頭で町内のけがれ、災いを祓い清めて廻り、新年の豊作と大漁、町内の安寧を祈願し、春を迎える行事である。太神楽は伊勢や桑名(三重県)、尾張(愛知県)の専門の神楽師が、毎年、決まった地域を訪れ、家々で獅子舞や曲芸などの神楽芸を行い、伊勢神宮等の神札を配り歩く芸能となる。ここでの「獅子」は単に悪魔を払う霊獣というより、「お伊勢さま」として神格化される。

3 獅子舞(御神体)の宮城県での変容

江戸時代の伊勢信仰の広がりもあり、神楽(獅子舞)好きの者が各地で模倣し始め、やがて地域の太神楽として全国に定着した。東北地方にもたいへん多くの太神楽がある。宮城・東北の民俗芸能研究者、千葉雄市によれば、東北に596 団体が知られている(5)。福島県の太神楽には専門の神楽師もいる。東北六県の中では、宮城県は4団体と特異など少ない。しかも、4団体は、福島県と隣り合った丸森町に2、山元町に1、山形県に隣接する七ヶ宿町に1で、いずれも隣県から直接にもたらされたものである。

県名	団体数
青森県	61
岩手県	111
秋田県	30
山形県	141
宮城県	4
福島県	249
計	596

東北の太神楽

(注5より)

最近の研究で、塩竈市塩竈神楽で行われている複数の獅子舞には、「第一 舞楽、田楽、神楽等の中にその一曲としてある獅子」、すなわち「仙台邊の出雲流の神楽にある獅子等」とともに太神楽の獅子舞があることが言われている。十二座神楽系の獅子舞は滑稽獅子舞、太神楽系の獅子舞は荒獅子舞と親子獅子舞とされる。同神楽では火伏の神符も配布している。

塩竈神楽の成り立ちは諸説あるが、一説に、「大正13年」に「宮城郡利府町沢乙の入

菅谷の人たち(仙台の十二座神楽である榊流青麻神楽^{あおそ}を伝承する人たち)より神楽の伝授を受けて「復興し、「昭和7年」に、「さらに旧来の獅子舞を編み直して演目に取り入れ」という(6)。これによれば、旧来の神楽が太神楽と見ることができる。県南の太神楽とは異なる経緯があるようだ。

4 春祈祷の獅子舞は宮城県独特の芸能

宮城県の北部海岸部、特に石巻市と女川町の各浜では、正月に悪魔払いの獅子舞が行われている。その獅子は本田分類の「第二 独立に行われている獅子」に該当する。新春に地域を祈祷することから、獅子振り、春祈祷ともいわれる。北部海岸部の限られた地域に120か所も春祈祷、悪魔祓・大漁・豊作・厄除・浜の安泰等を祈願する獅子舞が行われているのは、まことに特異である。

不思議なのは、これだけ特徴的な獅子舞が、いつ頃、どのように広まったのかが明らかになっていないことである。獅子頭は江戸時代以降の太神楽等に見られる、毛が渦巻型をした、いわゆる唐獅子が多いことから、多くは江戸時代、それも、嵩高の側面観や歯の形状から後期以降の可能性が高い。太神楽の獅子頭は赤色が多いのに対し、春祈祷の獅子舞では黒色もあり、中には赤と黒の二頭で舞う例もある。また、門を入るときに、田打唄^{かど}を歌う例が多い。例えば石巻市渡波地区^{わたのは}の「獅子風流^{ふり}」は門口で以下の内容の田打唄^{かどぐち}を歌う(7)。

(口上)

ヤレヤレ 明^{あき}の方から 目出度い田打^{たんぶつ}が 千八百人ばり 参って候

(本唄)

ヤヨー この方のお門松「ヨンヤラサーノ ヤッサノセ」

どこで迎える「ヨンヤラサーノ ヤッサノセ」

奥の深山の「ヨンヤラサーノ ヤッサノセ」

女川町竹浦の「獅子振り」も「田打^{たんぶつ}」が春祈祷に来たとの口上である。

ヤレヤレ 高砂や高砂や 明^{あき}の方から 田打^{たんぶつ}が 千八百人ばり

よーいと春祈祷に参りました

石巻市小竹浜^{こだけはま}の「獅子振り」は「暁^{あき}の方から春祈祷悪魔ばらい獅子舞たんぶつが参った」との口上で、「獅子舞」と「田打^{たんぶつ}」は同じものと意識されている。春祈祷の獅子舞が稲作の豊穰を予祝する「田打」と同じとは思えず、新春の門打ち「田打」は、本来、春祈祷と別に行われていたものが、石巻市近辺の浜で獅子舞を春に行うようになって、これと結びついたらと見られる。

5 正月の予祝・門打ちの「田打」^{たぶち}

「田打」は一般的に田植えに備えて田を掘り返す作業いう。宮城県では、農作業をしている時にこの唄を歌う(労働歌)のではなく、「田打」という正月に行われる訪問行事で歌われたもので、新しい年の豊作を祈る(予祝)行事である。

栗原市栗駒では小正月の晩に行われた。「15日の晩、大人が5、6人ぐらいの一団となり、手拭で頬被りをし、家々を廻って、竹ササラで庭を打って田打ちの真似をして餅や銭をご祝儀に貰う」(8)。この時に「田打祝い唄」を歌う。もらった餅等は隣組や厄年の人の家に持って行き、厄祓いのお祝いをしたという。獅子舞との関連は見られない。

田打祝い唄 栗原市栗駒

口上(於：門口)

トウトウトウ明けの方からめでたい たんぶちが近う仕り候
 こちらの田地と申するは 前に千刈後に千刈わきに千刈
 合せてササラ三千刈もあるそうだ ササ引連れましたる若い衆ども
 ふくべん酒の一杯も呑んで 鍬先揃えて打ってすけなさろ
 祝い唄(於：門口) ※一節の終わりにはかならず「オヤコラサーノサ」がつく
 アー祝いましよ祝いましよ どこから祝ましよ お門に立てたる
 三蓋小松のその枝へだてて こちらの枝には小鳥が巢をくい
 あちらの枝には夜だかが巢を食い ながめのよいとこは ヤレヤレおめでたい
 (於：戸ノ口)

アーそれにまたつづいてナ おうちのおやから つくづく見申せば 土台は黒金
 柱は黄金で桁梁金銀 屋根には白がねヤレヤレ みなこがねホーホー(9)

大崎市岩出山でも1月に「田打ち」^{たぶち}が行われた。

「14日の夜、若者たちが5人ぐらいで組を作り、鳴り鉦(嫁入りに馬の首につける)・ササラを持って、田打ち^{たぶち}をして家々を廻る。このときの「田打ち唄」があり、

オヤコラサーノサ
^{かど}門に立ったる三階小松
 かかる白雪みな黄金
 オヤコラサーノサ
 この家旦那さまのお衣装みれば
 金のご紋に(以下不詳)・・・

というのがあった。

廻ってこられた家では、お膳に米 1 升をはかり、一人に二切れ宛ての切り餅を添えてご祝儀を出す。貰った米や餅は「年祝いをしてやる」といって、厄年のもののある家へ持って行く」(10)。

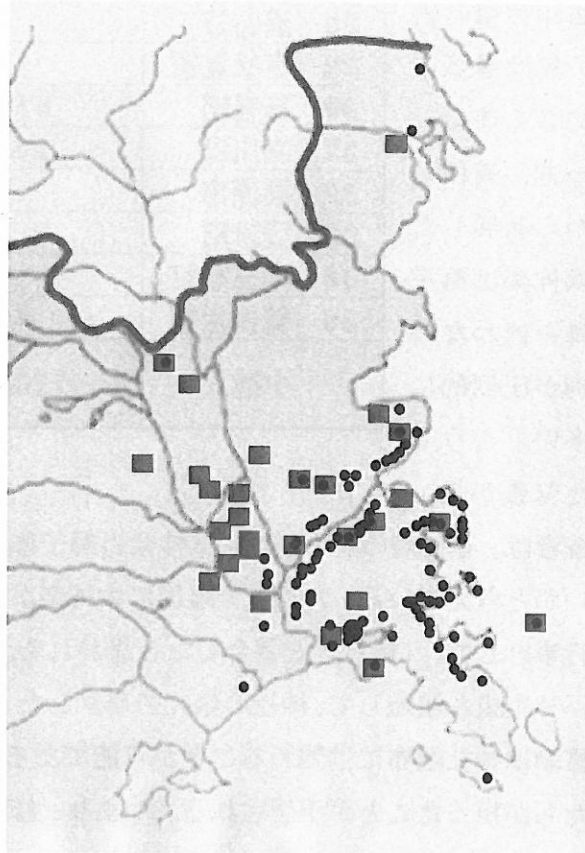
田打唄は獅子振り・春祈祷が行われる地域である、東松島市(矢本)大塩や石巻市北上町十三浜でも採取されている(11)。

なお、県下では同日、チャセゴといって、子供たちが「チャセゴめえった、めえった」と囃しながら家々を廻る、同様の行事も行われた。チャセゴは各地で行われ、「アキの方からチャセゴに参った、ヤッコラサノサ」と、唱える所(栗原市金成)もある(12)。

6 春祈祷の獅子舞の出自—浜神楽(獅子舞)との関係を探る—

神楽の獅子舞のうち、加美町は薬菜神社三輪流神楽(異伝系法印神楽、扁平型黒獅子頭)、石巻市桃生町の寺崎法印神楽(浜系法印神楽、嵩高型黒・赤獅子頭の 2 頭、古い型に扁平型黒獅子頭がある)、登米市は上沼加茂流法印神楽(異伝系法印神楽、扁平型黒獅子頭)・日高見流浅部法印神楽(異伝系法印神楽)の獅子と思われる。これらはいずれも春祈祷の獅子舞を行っていない地域である。この他、石巻市雄勝町の雄勝法印神楽(浜系法印神楽、扁平型茶獅子頭)も正月の獅子舞との関連がある。ここは春祈祷を行う地域である。

雄勝法印神楽(浜系)では「神楽の演目「獅子」が正月行事として独立した形で、「春祈祷の行事」として行われている。雄勝地区では各浜々を出発した飾り屋台が新山神社に集合し、宮司の祝詞奏上後、浜毎に獅子舞を奉納する。その後、各浜で一軒ごとに舞ながら進む。「舞い終わった家には「蘇民将来子孫門戸」と刷られたお札が配られる」(13)。神楽の獅子舞(悪魔払い)が分離して正月に悪魔払いの春祈祷を行っている典型である。



春祈祷の獅子舞の分布(●)
(■は法印神楽の所在地)

法印神楽の獅子頭の多くは、扁平型黒獅子で、江戸時代中期以前の形を継承していると考えられ、春祈禱の獅子頭(嵩高型唐獅子)より古い型と思われる。また、法印神楽の獅子舞は異伝系に多く残る。一方、異伝系から発展した浜神楽は獅子舞を伴わない例が圧倒的に多い。こうした背景から、

番号	市町村名	春祈禱	祭礼神幸	神楽獅子	太神楽	虎舞
14	仙台市		2	5		
15	多賀城市					
16	七ヶ浜町	1				
17	塩竈市				1	
18	利府町					
19	松島町		1			
20	富谷市			1		
21	大郷町					
22	大和町					
23	大衡村					
24	色麻町		1			
25	加美町		5	1		1
26	大崎市		2			
27	美里町		1			
28	涌谷町		1			
29	東松島市	1				
30	石巻市	97	1	1		1
31	女川町	19				
32	栗原市		11			
33	登米市		4	2		1
34	南三陸町	1	3			
35	気仙沼市	1	1			8
小計		120	33	11 県南40	1 県南4	11

宮城県の獅子舞

筆者は、春祈禱の獅子舞は、浜神楽の獅子舞から独立、分離する形で生まれたのではないかと考えている。ただ、分離後に太神楽が受け入れられている。さらに、正月の訪問行事として、「田打^{たんぶつ}」と習合したと思われる。江戸時代、神楽は郡単位で村に住む修験が神楽組を組織して、神社の祭礼で奉納した。春祈禱は正月の限られた時期に行うため、修験は神札配布には関わることが可能であるが、獅子舞の演舞は成立当初から地域の人たちが担ったことが予想される。つまり、修験のみで行う、江戸時代の法印神楽の奉納形態ではなく、明治以降の形態で行われている。とすれば、成立したのは早く見て、異伝系から浜神楽が生まれた、江戸時代の18世紀後半であるが、明治に入って生まれたものが多いかも知れない。分布地域で特筆できるのは、浜神楽の分布地域でも、内陸にあたる石巻市の旧桃生町で春祈禱は行われていない点である。春祈禱の獅子舞はあくま

で海岸部で生まれ、展開した、宮城県に特徴的な芸能である。

おわりに一まとめにかえて一

春祈祷の獅子舞は浜系の法印神楽の獅子舞から分離・独立して、本田分類の「第一 舞楽、田楽、神楽等の中にその一曲としてある獅子」から「第二 独立に行われている獅子」に変容したと考えられる。国内で行われているすべての芸能・行事の一枚下の層には別の姿がある。この変化を触媒するのは地域やそこに住む人などの、時代的・社会的な状況であろう。

春祈祷の獅子舞でいえば、第二の獅子となった以後にも変容が見られる。特に太神楽の影響が顕著にある。宮城県は東北他県と比較して、太神楽を受け入れていないと見られていた。江戸時代、仙台藩領であった現在の岩手県一関市内には太神楽がわりと受け入れられていた。宮城県では、太神楽を模倣して宮城県の「太神楽」として受け入れなかったのであり、実態としては、春祈祷の獅子舞の中で太神楽の核を受け入れ、春祈祷をさらに変容させたのだと判断される。

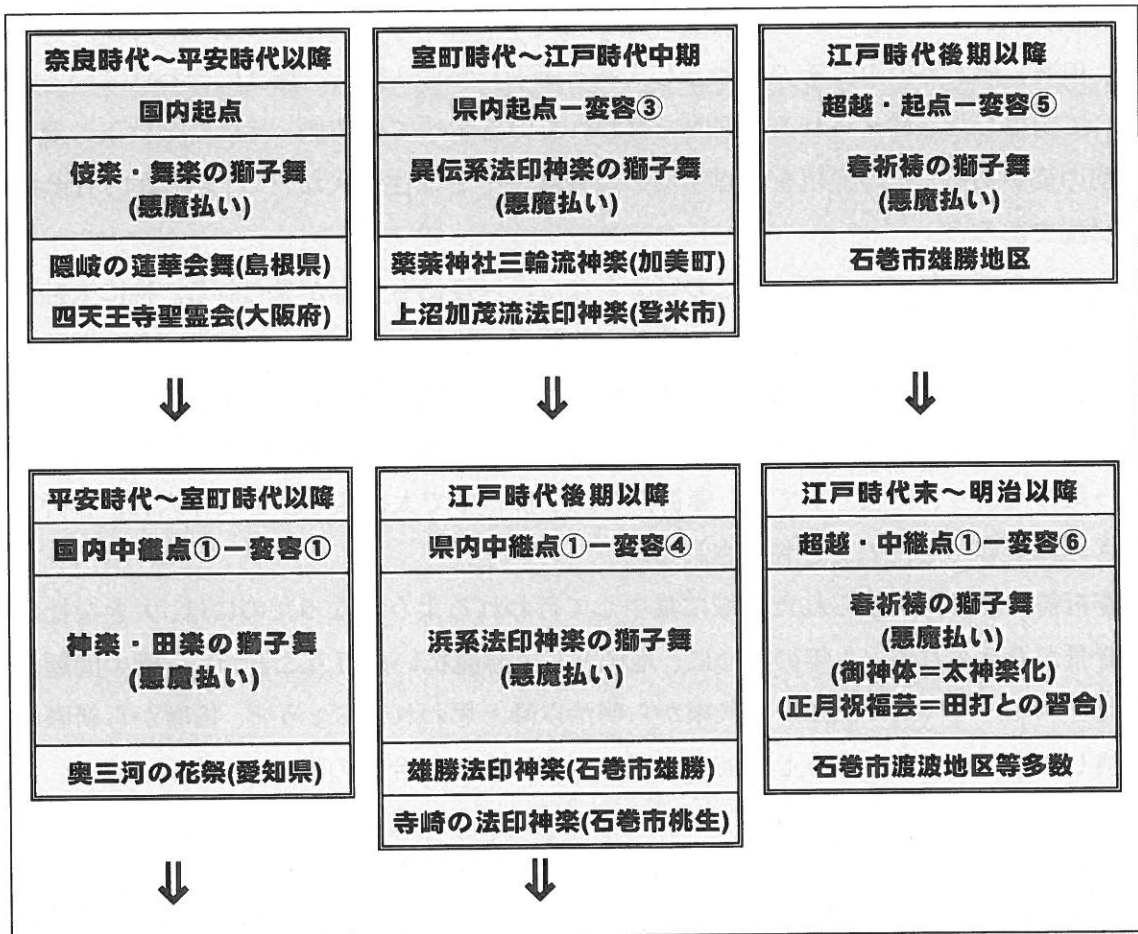
春祈祷の獅子舞に限られた地域に集中して行われるようになったのには、大きな社会的背景が考えられる。1年の始めに、地域として悪魔払いを行うことから、暦の問題が想起される。時代的には江戸時代末から明治以降と思われ、ちょうど、旧暦から新暦に転換した時期を含む。こうした時代背景の影響の有無は今後の課題としたい。

注

- (1) 本田安次「獅子舞考」『本田安次著作集 日本の伝統芸能』第 10 巻錦正社 1996 年 p 181・182)
- (2) 中村元『佛教語大辞典』東京書籍 1985 年 p 21
- (3) 福田アジオ他編『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館 1999 年 p 16
- (4) 東北民俗の会編『陸前の年中行事』萬葉堂書店 1971 年
- (5) 「宮城県の民俗芸能(2)」『東北歴史博物館研究紀要』2、2001 年 p 43
- (6) 三原直太郎「塩竈神楽」『宮城県の民俗芸能』宮城県教育委員会 1993 年 p 29~32
- (7) 千葉雄市「石巻市民俗芸能調査報告」『石巻市文化財だより』第 21 号 1992 年 p 7
- (8) 東北民俗の会編『陸前の年中行事』萬葉堂書店 1971 年 p 63
- (9) 宮城県教育庁文化財保護課『宮城県の民謡』宮城県文化財調査報告書第 109 集 1985 年 p 89
- (10) 東北民俗の会編『陸前の年中行事』萬葉堂書店 1971 年 p 93
- (11) 宮城県教育庁文化財保護課編『宮城県の民謡一民謡緊急調査報告書一』宮城県文化財調査報告書第 109 集 1985 年 p 90・91

(12) 東北民俗の会『陸前の年中行事』萬葉堂書店 1971 年 p 49

(13) 雄勝町教育委員会編集・発行『雄勝法印神楽』200 年 p 12



春祈祷の獅子舞のあり方